

3人の教諭が、中学校の被災状況や生徒らの様子について説明した＝尼崎市三反田町1



# 防災訓練の重要さを訴え

## 尼崎 気仙沼の教諭が講演

東日本大震災で被災した宮城県気仙沼市の中学校教諭らが、被災地の状況を伝える「気仙沼市と尼崎市の交流会」が25日、尼崎市三反田町1の市教育・障害福祉センターで開かれた。

尼崎市は、震災直後から気仙沼市を継続的に支援。24日から4日間、気

仙沼市内の大谷、鹿折、小原木中学校の生徒約30人を尼崎市に招待して、被災地の状況を学び、今後の防災に役立てるため、教諭らの経験を聞くことと、交流会を企画した。

3人の教諭が、それぞれの学校の取り組みを説明。震災後、中学生が高齢者の誘導に当たった例や、グラウンドの仮設住宅を一軒一軒訪ねて文化祭への招待状を送り、喜ばれた例などを紹介した。

質疑応答で、子どもの防災意識を高める方法を問われた大谷中の伊藤浩志教諭は「防災訓練を、とにかく繰り返しやっておくことが重要。そうすればいざという時、勝手に体が動くよ

うになる」と助言していた。

訪れた市立尼崎高校1年、大西瑠空君(16)は「被災地では地元にくたくてもいられない人が多いこ

とが分かった。自分たちは恵まれた環境にいます。被災者の方々の分も頭張りたい」と話していた。(黒田耕司)